

英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い

高 橋 直 彦

0. 摘 要⁽¹⁾

本稿では、標準英語の /j/ が生起位置に応じてふるまいを異にし、その違いが形態音韻的配置型の違いによるものであることを論ずる。こうした違いを示さぬ非標準方言もあるものの、そうした方言もまたここで想定する枠組で統一的に説明可能であることを併せて指摘する。

1 節では本稿の依拠する枠組の概要を提示する。具体的には、英語の不定冠詞をデータとし、これまでに提案されてきた三つの枠組、即ち、(I) 構造主義流 IA 方式に基づく異形態という概念を援用する枠組、(II) 生成文法流 IP 方式に基づく変更規則という概念を援用する枠組、(III) ひな形（照合）方式 = TM 方式に基づくひな形という概念を援用する枠組、この三者を比較参酌し、枠組 (III) が説明理論として妥当性をもつものであることを論ずる。これを承けて 2 節では、「不定冠詞 + /j/ 始まりの単語」という連鎖の示す音形を観察するが、その際、1 節で支持した TM 方式 (III) の予測するところとは一見矛盾する音形が予測されるように見えるものの、これは実は見かけ上のものであり、語頭と語中で /j/ の配置型が標準英語で異なることによるものであることを論ずる。併せて、語頭と語中でこうした違いを示さぬ非標準英語の音形の場合は /j/ の配置型の語頭・語中での同一性に起因するものであることを示す。

1. 英語の不定冠詞：IA 方式 vs. IP 方式 vs. TM 方式⁽²⁾

周知のように、英語の不定冠詞は、直続要素初頭の音形の違いに応じた交替を示す。即ち、音声レベルで二形式で具現する。

-
- (1) 本稿をまとめるにあたって、東北学院大学教養学部言語文化学科平成 21 年度原典講読の受講者である以下の学生諸君（あいうえお順）との討議が大いに参考になった。大里奈美、小野夏姫、菅野由佳、小屋薫里、鹿野栄子、田口知世、村上理奈のみなさん。記して感謝申し上げます。
 - (2) ここに示す分析は、高橋（2000：VI. 補説）で提示した英語の不定冠詞 a/an の分析に加筆したものである。なお、不定冠詞についての通時的考察は本稿の直接の関心事ではない。

(1)

	子音始まりの要素の直前	vs.	母音始まりの要素の直前
1	a book	vs.	an egg
2	a big egg	vs.	an elegant book
3	a really big egg	vs.	an extremely thick book
4	a historic scene	vs.	an historic scene

表の 1-3 から分かるように、この交替現象を規定している因子は直続要素の音環境——子音始まりか母音始まりか——であって、直続要素の統語・語彙範疇ではない⁽³⁾。左欄の a book, a big egg, a really big egg では book が名詞, big が形容詞, really が副詞であるが、全て子音始まりであるし、右欄の an egg, an elegant book, an extremely thick book では egg が名詞, elegant が形容詞, extremely が副詞であるが、全て母音始まりである。

次に、4 から分かるように、当該規定因子は（音環境という）言語内の因子（(intra) linguistic factor）⁽³⁾ であって、綴字（spelling）というパラ言語的な因子（paralinguistic factor）ではない。左の historic と右の historic とが同一の綴字であるにも拘わらず a ~ an という交替を示すのは、historic~historic 双方の第一音節に強勢がなく、先頭の [h] 音が随意的に出没するためである。もちろん、左の historic が [h] 音ありの子音始まりであり、右の historic が [h] 音なしの母音始まりである。

では、言語外の因子（extralinguistic factors）に関してはどうかであろうか。これに関しては、大きく 2 つの因子に分けて考えるべきものと思われる⁽⁴⁾。第 1 は、基本的に言語外因子であっても言語という認知領域と直接に接しており、外界と言語とのインターフェースの役割を担いつつ、身体を有する生身の人間の音声活動の基盤と大枠を規定している因子である。これは、性質上、生理学/解剖学/物理学等々の隣接諸分野の知見を援用しつつ明らかにすべき種類の制約であって、いかなる人間もこの制約の下で音声活動を行なっている。例えば、生理学的/解剖学的/物理学的に生成不可能な音や聴取不可能な音は、当然のことながら人

(3) 「音環境」という因子、という言い方は註 (5) でもう少し厳密な形で規定し直す。

(4) N. Chomsky の「ミニマリスト・プログラム」では、近年の言語理論の方向性を特徴付けている思考法の一つである「最小限出力条件 (bare output conditions)」が提唱されている。これは、「言語機能の認知（演算/計算）システムには、それに接する運用システムたる (1) 調音・知覚システムと (2) 概念・意図システムにより諸条件が課され、制約される」という趣旨のものである。（裏返せば、こうした「外側からの」動機づけを持たぬ構成物はよほど強力な動機づけがない限りは措置し得ないとも解釈可能な条件である。）本稿の文脈では、第一に、(1) の課す条件・制約のみを考察の対象とし (2) の課す条件・制約は考察しない。第二に、(1) のさらに「外側にある」動機づけ（本文の次のパラグラフで「第 2 の因子」と呼んだもの）に関しても、本文で以下述べる理由で考察の対象から外す。この第二の点に関する本稿の立場は Chomsky の立場と基本的に同じであると思われる。

間言語では決して使用されることがないし、さらに、(他の条件が同じであれば) 生成・聴取が困難な音ほど回避される傾向を示すことになる。

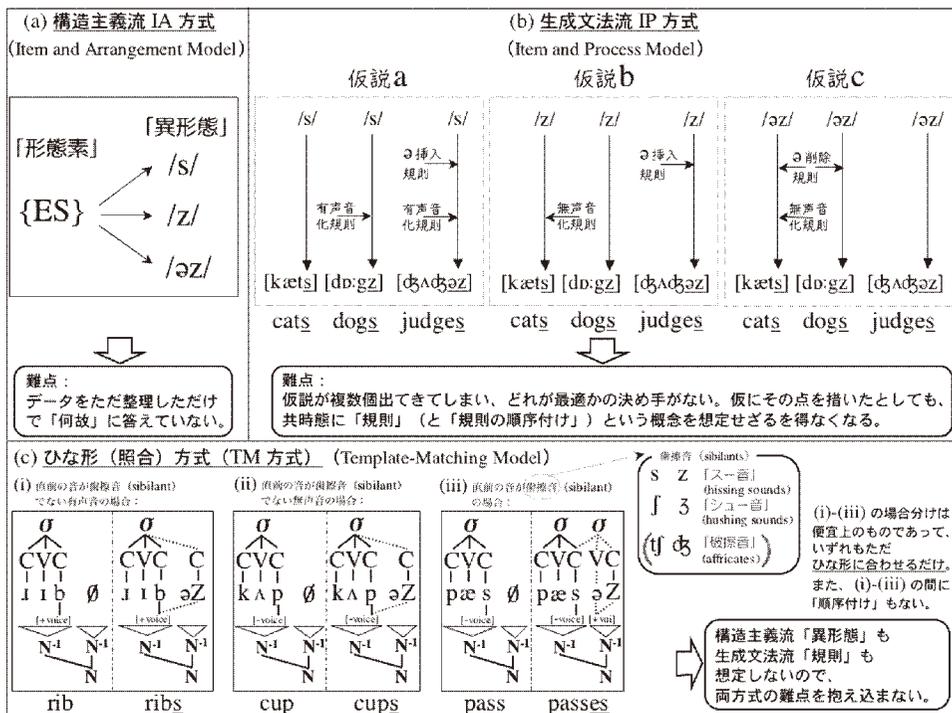
第2の因子は、上記第1の言語外因子よりもさらに「外側」に位置づけられるべきものであって、これにはいわゆる「社会言語学」(もしくは、むしろ「言語社会学」と呼称すべき分野)が好んで取り上げる類の因子が含まれる。しかしながら、この領域に属するとされる因子たる「人種」やら「気候」やら「社会変動」等々は、なるほど確かに音変化の「誘因(trigger)」とはなり得るものの、こうした言語「外」の誘因を幾ら並べても、「可能な音変異/変化 対 不可能な音変異/変化」を規定している言語「内」の機構の本質は基本的に解明し得ない。「言語」学は正に後者(言語「内」機構)の解明を目指す。分かりやすく極端な例で言えば、仮にこのレベルでの言語外の因子(例えば政治的な因子)がとてつもなく強靱なものであったとしても、それが言語内および前パラグラフで述べた意味での言語外の因子に照らして不可能な言語形態を強いるものであるような場合には、言語のレベルでそうした言語形態が実現を見ることは当然のことながら決してない。従って、本稿では、この領域に属する因子は基本的に勘案の対象としない。(ただし、こうした点に関しては、Mielke (2008) の知見も参照のこと。)

さて、以上の因子分解を前提とした上で、英語の不定冠詞 a/an をもう少し厳密な形で分析してみよう。結論から述べるなら、この問題に対しては、従来想定されてきた典型的な二つのアプローチ、(I) IA 方式=「異形態方式」と (II) IP 方式=「規則方式」とがいずれも、看過すべからざる「致命的な誤謬 (pernicious aberrations)」と呼ぶべき性質の難点を抱え込んだものであることが分かる。そして、こうした方式の抱えるいずれの難点をも内抱しないアプローチとして、(III) 筆者が1988年より(名称に紆余曲折はあるものの)一貫して想定している TM 方式=「ひな形(照合)方式」を援用した分析例が妥当性をもつものであることが分かる。

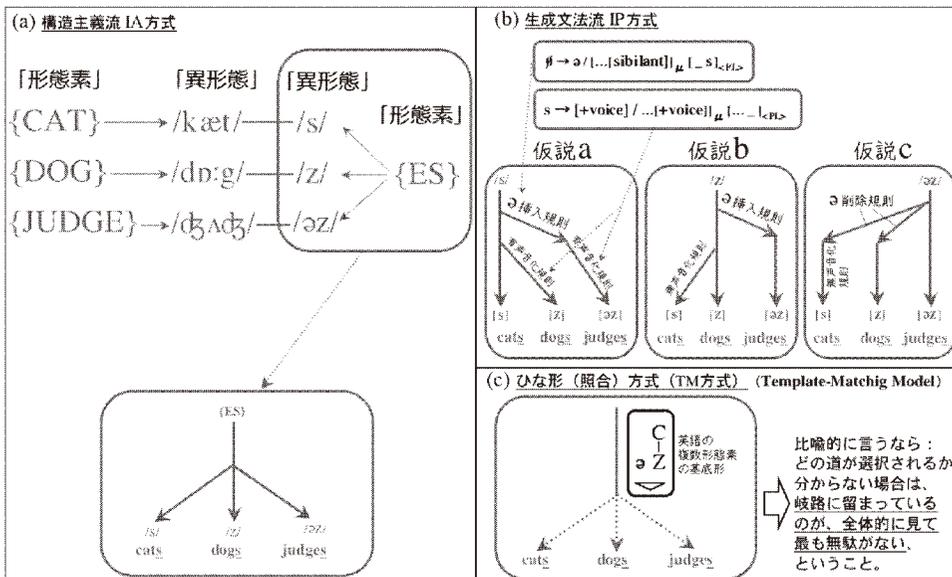
この点は、上記三方式それぞれの説明法の基本方針の違いを、もう少し閱しやすいデータである「英語の規則複数形」の場合と比較参酌すると分かりやすい。(2)と(2')の図式を参照されたい。(2)は英語の規則複数形に対する上記三方式の説明力の違いを、理論の得失とともに例示したものであり、同じ内容を別の観点から捉え直したものが(2')である。不定冠詞 a/an の場合も基本的に全く同様である。(3)が英語の不定冠詞に対する上記三方式の説明力の違いを、理論の得失とともに例示したものであり、同じ内容を別の観点から捉え直したものが(3')である⁽⁵⁾。

(5) 註(3)で予告したように、ここで「音環境」という因子、という言い方をもう少し厳密な形で規定し直そう。Čの記号は、両音節の配置型が可能な場合、そしてその場合に限り(両)音節に連(96頁へつづく)

(2)



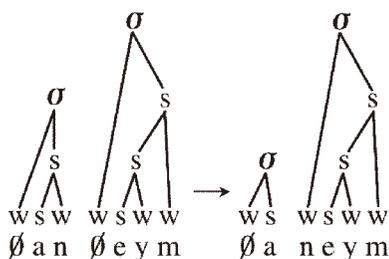
(2')



困みに、IA 方式と IP 方式との間で交わされた理論上の攻防の歴史的経緯に関しては Hockett (1954) 等を、また両方式を止揚した TM 方式のもつ妥当性に関しては高橋 (1995, 2005) 等をそれぞれ参照されたい。

なお、Kiparsky (1979: 428-9) は an aim が a name のように発音される場合を (4) のような派生で示しているが、この説明は、以下の点で妥当性を欠くものである。① 変更規則に依拠している。② an aim と a name の相違 (速い発話速度の場合を除き、前者のみが両音節的な n) を把捉できない。③ 不定冠詞に異形態を想定している。④ 引用形式以外 an は単独では実現し得ない (註 (5) 参照) という点を理論的に予測できない。

(4)



以上、本節では、英語の不定冠詞の分析として、(I) 異形態を援用する IA 方式、(II) 変更規則を援用する IP 方式、(III) ひな形を援用する TM 方式、の三者を比較し、方式 (III) が説明理論として妥当であることを見た。

2. 英語における /j/ のふるまい

本節では、前節を承けて、連鎖「不定冠詞 + /j/ 始まりの単語」の示す音形の観察を通じ、本題である英語の /j/ のふるまいについて考察する。TM 方式の予測するところとは一見矛盾する音形が、実は、語頭と語中とで /j/ の配置型が標準英語で異なることによるものであること、こうした違いを示さぬ非標準英語の音形は /j/ の配置型の語頭・語中での同一性に

(93 頁より)

結されることを示す。その証拠に「引用形式」(citation form) という特殊なケース以外 an が単独で発話されることはない。これに対して、in Itary の in 等は、子音が後続したり前置詞残留等で文末に生じた場合でも——即ち、両音節的にならない場合でも——常に発音される。つまり、Č が関わるタイプの両音節性は、不定冠詞にのみ想定されるという語彙情報が必要となる点で、もはや純粋に音声的な性質のものではなく、形態音韻的な性質をも併せ持つ、という点で興味深い。言わば、「弾音のケース (純粋に音声的なケース)」と「連濁等のケース (形態音韻的なケース)」(cf. 高橋 (2000: 註 (16)) のちょうど中間的な性質を有すると見做される (cf. 高橋 (2000: 註 (23))。)

起因するものであること、を示す。なお、(5)に本節全体の結論を図式化しておくので、随時参照されたい。(図中の口腔断面図は Laver (1994) より一部改変の上拝借した。)

方言 A (標準方言) は連鎖「不定冠詞 + /j/ 始まりの単語」を a union, a ewe, a eunach 等と発音し、方言 B (非標準方言) は同連鎖を an union, an ewe, an eunach 等と発音する。つまり、前者は /j/ を「子音扱い」し後者は「母音扱い」していることになる。図ではそれぞれの形式の下に Google Fight での検索結果を掲示してある。非標準方言の形式が意外に多いことが分かる。ただし、インターネット検索というものは、便利な反面、そのままでは文脈を全く考慮せずに「何でも拾ってくる」といった難点もある。そこで、「英語圏・米語圏それぞれの教育機関」という縛りをかけた結果もその下に示しておく。ここでは非標準方言の形式がかなり減っていることが分かる⁽⁶⁾。

さて、ここで TM 方式にとっては次の点が⁵ (一見) 問題となる。即ち、理論としては A, B 双方の方言形を共に出力可能でなければならぬのに、new [nju:] 等のデータに鑑みると、いま考察の対象としている「不定冠詞 + /j/ 始まりの単語」の示す音形に関しては、理論が一律に、方言 B (非標準方言) に見る連鎖 an union, an ewe, an eunuch 等のみを予測してしまい、方言 A (標準方言) の連鎖 a union, a ewe, a eunuch 等が不当に排除されてしまうという点である。この問題はいったいどのような形で回避すればよいのであろうか。1 節で述べた論点からするならば、少なくとも枠組としては TM 方式自体は保持する (即ち、a/an の基底形として (3'c) は想定し続ける) ことが前提となる筈である。

結論から述べるなら、この問題は次のように考えればよい。(3), (3'), (5) の左上のデータ (a book vs. an egg) を見れば分かるように、a/an の基底形中の Ć が両音節の要素として実現するための一要件は、直続要素が V (=「母音扱い」) ということである。要するに「直続要素が V (=「母音扱い」) ならば不定冠詞は an として実現し、直続要素が C (=「子音扱い」) ならば不定冠詞は a として実現する」ということである。ならば、A, B 双方の方言形を共に出力可能とするためには、以下のように想定すればよいという結論に至る。即ち、「方言

(6) もとよりこれでも万全ではない。というのも、an union 等の形式が英語圏教育関連ページに記載されたからとて、これを以てページ作成者が当該形式を容認しているとは必ずしも見做せず、例えば「an union 等の形式はけしからん」との趣旨で、論の展開行きがかりとして引用したにすぎないという可能性も排除されないからである。また、誤植ということもあり得る。例えば、(これはサイトではないが) Reetz and Jongman (2009: 7) には次の 1 文があるが、「an usual word」は「an unusual word」の間違いであろう。Whenever a term is introduced, it is printed in bold in the text and its transcription is given in the index if it is an usual word. しかしながら、本稿ではこうした問題には立ち入らない。本稿の趣旨は、規範的判断を下すことではなく、両形式を認めた上で、それぞれの基になっている配置型を特定すること、両形式を導出可能な理論を構築することにあるからである。その点で、教育上の問題とは切り離して考えねばならない。

A の union 等の語頭の /j/ は C(=「子音扱い」) であり、方言 B の union 等の語頭の /j/ は V(=「母音扱い」) である」と理論上見做せばよい、という結論に達することになる。要は、語頭の /j/ の配置型に関しては、図 (5) の「語頭」の如くに〈方言A〉、〈方言B〉に関してそれぞれ想定すればよい、ということである。〈方言A〉の /j/ は理論上一個の子音扱いであり、〈方言B〉の /j/ は理論上一個の子音扱いではなく、後続母音の一部を成す前要素である、と見做す訳である⁽⁷⁾。そして、「語中」の場合は、図の「語中」(の左欄) に示したように、new [nju:] 等は A, B 双方の方言形共に /j/ は理論上「後続母音の一部を成す前要素」と見做すことになる。つまり、/j/ の扱いが〈方言A〉では「語頭」と「語中」で異なり、〈方言B〉では「語頭」と「語中」で同じ、となる訳である。このことは、/j/ の扱いを純粹に音声的な観点から捉えるのではなく、「語頭」や「語中」といった概念にも言及するという意味で「形態音韻的配置型」の問題として捉える、ということの意味する⁽⁸⁾。

ここで三点ほど付言すべき点がある。第1点。図で「語中」左欄に示したような音連鎖は、項目によって多少不安定なものがある。例えば、安定した [pju:], [bju:] 等に対して、[tju:], [dju:], [nju:], [sju:], [fju:] は [j] の有無に関して (〈方言A〉、〈方言B〉とは別種の、英米差等の) 方言差を示す、という点である (cf. *tune*, *duke*, *new*, *suit*, *issue* 等)。いずれも /j/ の前が coronal sounds (舌頂音) であるという共通項がある。このうち、*issue* は興味深い方言差を示す (図 (5) の右下) ので、以下であらためて採り上げることにする。

第2点。図で「語中」右欄を参照されたい。「/j/ が理論上後続母音の一部を成す前要素と見做される」ケースでは、当該後続母音に全ての母音が許容される訳ではない。少なくとも /j/ に低段母音が後続するような連鎖は排除される (*[nja:])。

第3点。周知のように、...want you..., ...would you... 等は随意的に「口蓋音化+破擦音化」を示す (図 (5) の右)。この点も後程採り上げる。

このように、英語では、/j/ は形態音韻上様々な興味深いふるまいを示すことが分かる。いま「英語では」と言ったが、/j/ に限らなければ、実は類似のふるまいを示す音は他の言語にも観察される。例えば、声門閉鎖音 [ʔ] は、「理論上後続母音の一部を成す前要素と見做される」ケースがドイツ語、中国語、英語で観察される (<<http://raspberrys.jp/glottal.html>> に音声を載せてある)。

(7) ここでは分節素の内部構造論には立ち入らない。

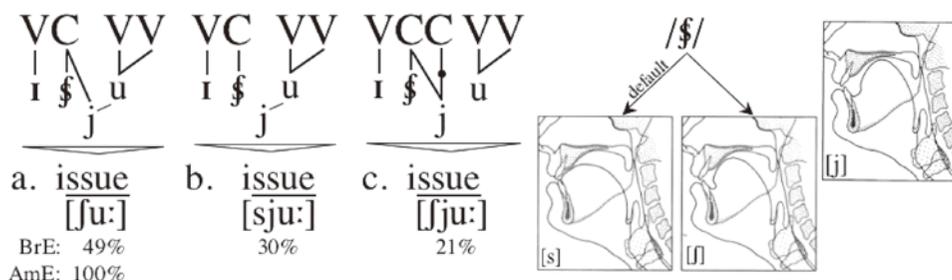
(8) ついでに指摘しておく、例えば *street* 等では音節初頭に関して、子音が3個連鎖しているときされたり、当該連鎖が CCC と表記されたりすることがある。しかしながら、(英語の音節構造の正式な定式化は本稿の範囲を超えるものである、ここではこれ以上立ち入らないが、) こうした陳述は記述的には妥当に見えても説明的には妥当性を欠くものである。

(6)

- a. Guten Abend [gu:ʔŋ̄ʔe:b₂nt]⁽⁹⁾
- b. ting yin yue [tʰin in ʔyɛ] ~ [tʰin in yɛ]⁽⁹⁾ 听音乐 / 聽音樂
- c. an icy dessert [ən̄ a:si: d:zɜ:t] ~ [ən̄ ʔa:si: d:zɜ:t]

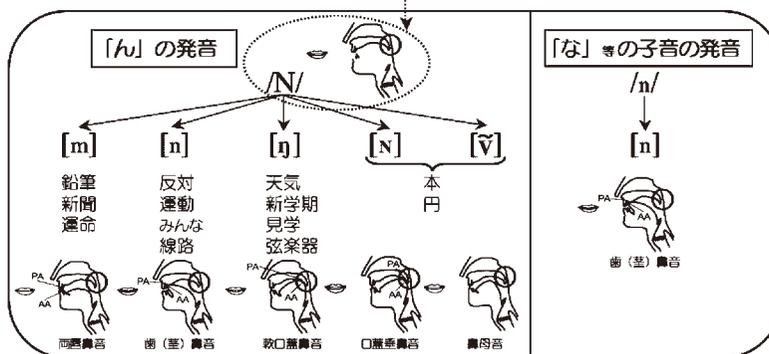
さて、上で付言した第 1 点と第 3 点に関わる /j/ の特異性の問題に移ろう。まず、第 1 点の *issue* の方言差 (図 (5) の右下) の問題から考える。結論を先に述べるなら、これまでの考察を基に、それぞれの方言形は以下の (7) のように分析可能である。図中の記号 /\$/ は、本稿で臨時に考案した記号であり、内容としては、「基底でまだ [s] とも [j] とも特定されていない抽象的な段階の音」を便宜上表す記号とする⁽¹⁰⁾。

(7)



- (9) Guten Abend は、英語話者がとかく [...ŋg...] とアンシェーマンを適用して発音しがちであるが、ドイツ語の標準発音は [...ŋ ʔe...] である。また、拼音では、「听 / 聽」は ting と転写されるが、ng の部分は例えば英語の king 等の [ŋ] (軟口蓋鼻音) とは異なり、[n] (口蓋垂鼻音) である。また yin yue 「音乐 / 音樂」の部分も英語話者がとかく [...nyg...] とアンシェーマンを適用して発音してしまいがちであるが、これも [in ʔyɛ] (もしくは速い発話 and/or やや sloppy な発音等では [in yɛ]) である。
- (10) これは、ちょうど、日本語話者が「ん」で表記される音を、(実現形レベルでは様々な音として生起するものの) 抽象的なレベルでは基本的に「同一の音」とであると無意識裡に把握しているという直感 (だからこそ「ん」という同一の文字で表記するのであろう) のケースと類似している。この抽象的なレベルの音を便宜上 /N/ で表記すれば、以下のような図式を想定できる。

弁の調音の点で鼻音ということだけ指定されていて調音位置が未指定 (固では無なし) の抽象的なレベルの音。調音位置は後続閉鎖子音がある場合その子音の調音位置に「右倣え」する。



a では /j/ の口蓋音性 (palatality) の影響で [ʃ] で実現し⁽¹¹⁾, b では /j/ の影響を受けずにデフォルトの [s] で実現し, c では /j/ の影響で [ʃ] と実現するのに加えて子音扱いの /j/ も [j] と実現している。c は語中であるにもかかわらず /j/ が子音扱い (C と連結) されており, その意味で有標の音形と目される。それを反映してか米音で 0%, 英音でも 21% の使用に留まっている⁽¹²⁾ (有標性と頻度が必ずしも直接連動する訳ではないが)。なお, ここでは (7a-c) 間の「関連性」を /ʃ/ を軸に捉えた訳だが, 立場によっては, こういった「関連性」自体を理論で把捉する必要性を疑問視する向きもあり得よう。それはちょうど, 日本語で「ちょうふく」と「じゅうふく」(重複) との共時的関連性を捉える必要性がないのと同様だ, という訳である。しかしながら, ここでは (7a-c) の音形が「ちょうふく」~「じゅうふく」の場合ほど乖離してはいないということに加えて, /ʃ/ という原音素的要素の導入によって共時的関連性を理論的に云々し得ようになっていると見做し, 一応 (7) のままにしておく。(因みに, 傍証として, (7a-c) のうち複数の形式をレジスターごとに使い分ける話者もいる。)

次に, 上で付言した第 3 点に関わる /j/ の特異性の問題に移ろう。図 (5) の右に示したように, ... want you..., ... would you... 等は随意的に「口蓋音化+破擦音化」が生じる。この「口蓋音化+破擦音化」が you の語頭の /j/ に起因するものであることは明らかであるが, 面白いことに, 同じく /j/ で始まっているながら「口蓋音化+破擦音化」を (少なくとも「破擦音化」を) 引き起こさない形式もある。

- (8) a. I want you. [...tj...]~[...tʃ...]
 a'. I want Yosaku. [...tj...]~*[...tʃ...]
 b. Would you be able to hear at such a distance? [...dj...]~[...ɟ...]
 b'. Would Yosaku be able to hear at such a distance?
 [...dj...]~*[...ɟ...]

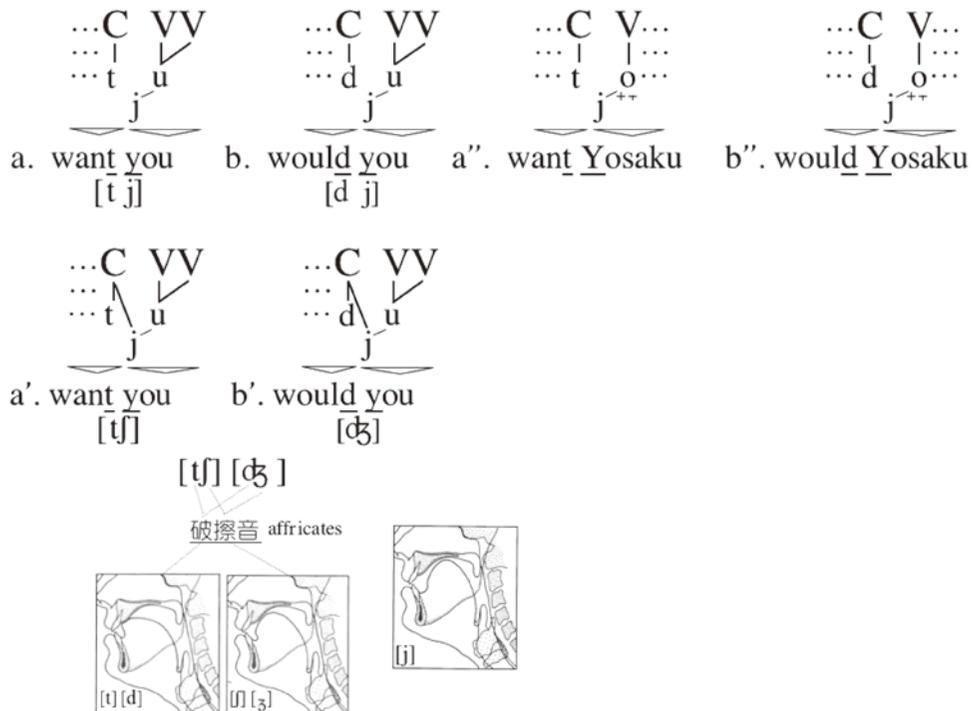
これはどのように考えればよいであろうか。おそらくは, 「(口蓋音化+) 破擦音化」を阻む因子は, 当該語彙項目が「固有名詞」である点に求められると思われる。同じく人物を指す語彙ではあっても, you が具体的に誰かを特定する機能をもったものではなく指示的汎用性をもった形式であるのに対して, 固有名詞は, 性質上 (偶然の一致を除けば) 具体的にある人物に特定の割り当てられたものである。そうした言わば「特権的な」語彙項目に対して

(11) /j/ は ambisyllabic であるため「短い」と想定する (cf. 高橋 (2000))。

(12) Wells (1990: 379)。

「(口蓋音化+) 破擦音化」を適用してしまうことが憚られるといった心理が無意識裡に働いているものと推定される。以上の考察から、you と Yosaku とは /j/ に関して以下に示す配置型の違いがあると想定することが可能となる⁽¹³⁾。

(9)



3. 結 語

本稿では、TM 方式を理論的枠組として想定し (1 節)、以下の点を論じた。即ち、標準英語の /j/ は生起位置に応じてふるまいを異にするが、その違いが形態音韻的配置型の違いによるものであることを論じ、併せて、こうした違いを示さぬ非標準方言もまたここで想定する枠組 (TM 方式) で統一的に説明可能であることを論じた。加えて、論考の過程で /j/ の示す特異性を三点ほど指摘し、それに対する理論的説明も試みた (2 節)。なお、2 節で「理

(13) このような事象は、1 節で本稿が否定した、言語形式に影響を及ぼす「言語社会的な因子」の一例と見做せるのではないか、との反論もあり得る。しかしながら、当該事象は言語社会的な因子というよりは、語用論的な因子と考えた方が当を得ている。加えて、本文で言う「固有名詞」というカテゴリーは既に言語カテゴリーとして文法化された概念である。

論的には〈方言 A〉〈方言 B〉共に説明されねばならぬ」としたが、この点はいかなる枠組にも等しく課された課題なのであって、TM 方式を想定したがために抱え込んだ課題であるなどと誤解してはならない。

参 照 文 献

- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press. (外池滋生・大石正幸 (訳) (1998) 『ミニマリスト・プログラム』翔泳社.)
- Hockett, C. F. (1954) “Two Models of Grammatical Description’, *Word* 10, 210-31 ; Joos, M. (ed.), (1957) *Readings in Linguistics*, American Council of Learned Societies, 386-99.
- Kiparsky, Paul (1982) “From cyclic phonology to lexical phonology’, In H. van der Hulst and N. Smith (eds.), *The Structure of Phonological Representations*, vol. 1, Dordrecht : Foris, 131-75.
- Laver, J. (1994) *Principles of Phonetics*, Cambridge University Press.
- Mielke, Jeff (2008) *The Emergence of Distinctive Features (Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory)*, Oxford University Press.
- Reetz, H. and A. Yongman (2009) *Phonetics: Transcription, Production, Acoustics, and Perception (Blackwell Textbooks in Linguistics)*, Wiley-Blackwell.
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学, 107-78.
- (2000) 「弾音の生起環境」, 『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 29 号, 東北学院大学, 67-114.
- (2005) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学教養学部論集』第 142 号, 東北学院大学, 53-75.
- Wells, J. C. (1990) *Longman Pronunciation Dictionary*, Longman.